

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

生徒会厄払執行委員

支倉 葉

高岡智空

表紙 / 草上明



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『生徒会厄払執行委員 支倉葉』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



生徒会厄払執行委員

支倉 葉

高岡智空

表紙／草上明

登場人物紹介

Characters

はせくらしおり

支倉 栞

学園に現れる霊を退治する黒髪の大和撫子少女。少し人見知りし、口調もおとなしめ。

オレンジ色の光が西の窓から差し込む、下校時刻が近づいた夕暮れ。校舎内もすっかり静まり返り、昼間の喧騒などどこにも残っていない。僅かに聞こえるものといえば、クラブ活動で汗を流す生徒の掛け声、教師たちの会議、そして……生徒会室にて、少女が本のページをめくる音だろうか。

「……………」

橙色に染まった生徒会室ではブレザーの少女が一人、椅子に座り、膝の上の文庫本にじつと目を向けている。黒い瞳をびくりとも動かさず、同じペースで本を読み進めてゆく少女は、まるで時間を忘れているかのように見えた。

時折、開け放たれた窓から風が流れ込み、少女の艶やかな長い黒髪を揺らしてゆく。眉の辺りで切り揃えられた前髪が目元にかかることはないが、柔らかい髪質のためかサイドから髪が流れて視界を遮った。

「ん……………」

少女は自然な動作でそれを耳にかけ、また本に意識を戻す。黒い瞳に黒い髪、陶磁器のような白い肌の少女は大和撫子と呼ぶに相応しく、動き一つとってもしとやかで奥ゆかしさを感じさせる。

いつの間にか夕日は沈み、夜の入り口に差ししかかっているのだが、それを感じさせない、時の流れさえ止まったような和やかで落ち着いた空気。そんな静寂の中で小説を読むこと

は、彼女にとって至福のひとつときである。——けれど、それがいつまでも続くということ
は彼女の役職の性質上、あり得ないことだった。

——バァンツ!

「すいませんっ! 失礼します!」

静寂を閉じ込めていた生徒会室の扉が、けたたましい音を立てて開かれる。眼鏡をかけ
たポニーテールの少女が、息せききらして飛び込んできた。なにやら焦りを浮かべたよう
な表情だったが、本を読みふける黒髪の少女を見た瞬間、その顔が安堵に緩む。

「支倉さん……よかつたあ……」

名を呼ばれたことに反応し、黒髪の少女——支倉葉は本から顔を上げた。

正面に向けられたその顔は透き通るような白さ、けれど不健康な印象など少しも与えな
い瑞々しさがある。駆け込んだできた少女をうかがう黒い瞳は切れ長で、見ると吸い込まれ
てしまいそうな深みを持ち、その深淵には凜々しさが垣間見えた。シュツと尖ったあごの
ライン、形のよい鼻梁、そして桃色の小さな唇。どれもが瞳の魅力と相まって、少女の美
貌をより美しく際立たせている。

「ん……?」

けれど——周囲を見回し、自分しか部屋にいないと気づいた途端、少女の美貌は微かに
曇り、困ったように眉が八の字に寄せられた。

(どうしよう……知らない人……)

気丈そうに見える外見とは裏腹に、葉はやや人見知りするタイプだった。相手は同学年ながら隣のクラス、顔は見たことがあるかもしれないが話をしたことはないという程度の関係。ほぼ初対面のためだろう、葉は緊張に身を強張らせる。

とはいえ、ただならぬ様子の来客を放っておくわけにはいかない。人と長く顔を見合わせているとすぐに赤面してしまふ癖を自覚している黒髪の少女は、ドキドキと高鳴る鼓動を抑え、少し視線を逸らし気味にして口を開いた。

「……どうか、した？」

涼やかな声で、小首をかしげた葉が問いかけると、間髪入れず少女が答える。

「大変なの……東校舎の二階、大鏡で……」

その僅かな言葉、けれどそれだけで、葉はすべてを把握したように頷いた。

「……そう、わかった」

さきほどまでの緊張もどこへやら、眉根をキリリと引き締めると、手に持つものを文庫本から細長い布袋に持ち替え、椅子から立ち上がる。その立ち振る舞いは慎ましい大和撫子のものから、まるで女武士のような凛々しい姿へと変化していた。

立ち上がった葉の背丈は、女子平均を十センチほど上回る。白い長袖のブレザーに包まれた腕はスラリと長く、薄いブルーのスカートから覗く脚は眩いばかりの脚線美を誇って

いた。特に、ほっそりとした脛脛から肉感溢れる扇情的な太もへのラインは、学園内の男子ばかりか女子生徒まで悩ませるほどだ。ブレザーの下、白いシャツの胸元を女子の制服はリボンで飾っているが、葉のそれは他の生徒に比べるとやや形が乱れている。その原因は布地に隠された柔らかな肉双球、それが大きく胸元を持ち上げているからだった。

立ち上がった拍子にたゆんと弾んだ豊満な乳房は、服の上からでもその形のよさがわかる美乳、だというのにサイズはFカップはあろうかというほど。形とサイズ、双方を併せ持った、まさに理想的なバストだといえる。もちろん、肩からのラインは華奢で女性特有の細さ、ウエストもキュッと引き締まり、スカートを軽く押し上げる桃尻は両手で包み込めそうなほど小振りでどこから見ても太いなどという印象は抱かせない。バストだけでなく、スタイルすべてが他を圧倒していた。

極めつけに、そのかんばせは誰もが息を飲むほどの美貌。眩いばかりの可愛さではなく、クールで深みのある瞳、そして人と視線を交わさない仕草からどこか神秘的な美しさを見せるため、男女問わず、葉に惹かれるものは多かった。

例にもれず立ち姿に見惚れている少女に、葉は変わらぬ様子で呟くようにささやく。

「合わせ鏡の魔……すぐに、行く」

かけられた声にハッと気づくと、少女は慌てたようにコクコクと頷きを返した。

「は、はいっ、お願いします！」

(……?) 同い年なのに……)

怪訝そうに眉を寄せ、なぜか顔を赤らめて敬語になった少女に疑問を抱きながら、栞は西校舎三階の生徒会室を後にする。現場は東校舎の二階、校則を無視して走れば一分とかならない距離だ。右手に布袋を掴み、栞はリノリウムの廊下を駆けだした。



私立黒桜学園こくおう——。

都内から大きく離れた緑深い森の中、小高い丘の上に造られたここは、良家の子息令嬢ばかりが通う名門校。一学年に六十名ほどしか在籍していないこの小さな学園には、数多くの怪談——都市伝説ならぬ、学園伝説が伝わっていた。もともと、それらがただの噂で終わるといふならなんの問題もない。問題なのは——この学園において、伝説は噂で終わらないということ。それらはすべて、現実には起こりうる事象なのだ。

夜な夜な動き回る石像や模型、丑三つ時に現れる怪人に、異次元への扉。どこの学校にも一つや二つは転がっている怪談話が現実化した多くの霊障は、学園を閉鎖に追い込むほどの被害をもたらした。それらはいつしか『厄霊』と呼ばれ、学園の未来には暗雲が立ち込めることになる。

しかし、この学園の名声を保とうとする有力者たちは厄霊から学園を守るため、退魔の家系から特別な力を持った若者たちを奨学生として招いた。

——それが、『黒桜学園生徒会 厄払執行委員』。
支倉葉も、そのメンバーの一人である——。



現場に向かつて馳せる葉は、入学時に聞かされた学園伝説の内容を思いだす。

（合わせ鏡の魔……たしか、儀式を伴う悪霊召喚……）

夕方と夜が入り混じる逢魔が刻……夕日の沈む瞬間に、東校舎二階の踊り場、そこに設置された大鏡で合わせ鏡を行うと、映り込んだ十三番目の虚像に理想の異性が現れる。それこそが合わせ鏡の魔——別名を大鏡の想い人、という学園伝説の一つである。

現れた異性はそのまま自分の恋人として振舞ってくれるというのだが、恋人というのは、早い話が一夜の情事の相手。しかも理想の異性という部分においては、どんな例外もなく叶えられるということだった。けれど……この情事というのがなにより曲者。人ならざるもの相手の情事など、それが身にどれほどの弊害をもたらすのか、想像に難くはない。もともと、好奇心に心を奪われた若者にはそれがわかるはずもないのだが。

「……っ、これは……」

現場に到着した葉は、駆けていた足を止めて踊り場を見下ろす。鏡があるということと通常より広く造られた踊り場には、目を背けたくなるような光景が広がっていた。

合わせ鏡を試みた生徒たちなのか、四名の女生徒がうずくまるように倒れ込んでいる。

彼女らの制服は一人の例外もなくはだけ、乱れ、身体中に体液と思しき粘液がまとわりついており、その顔は歡喜と愉悅の色に包まれていた。虚ろながら熱っぽく潤んだ瞳は虚空をさまよい、半開きの唇からは唾液の糸が床との間にツウ……と橋をかける。湯気さえ立ち上りそうなほどの生暖かい吐息が、口からこぼれていた。

しつとりと湿った唇には呆けた笑みが浮かび、目元は緩みきり、顔は耳の先まで紅潮している。明らかに淫悦に狂わされたとわかるような表情で、微かに動ける女生徒などは、逃げようとするとどこるかまとわりついた体液を掬い取り、ちゅぱちゅぱと音を鳴らしながら、幼児のように自分の指に吸いついていた。

あまりに淫らな様に葉は頬を赤らめる。これまでの厄払いにて、そういった被害にあった生徒の姿を何人も見てきたからこそ……それらが、厄霊による陵辱を受けた痕跡なのだとすぐにわかった。けれど彼女たちは一様に、淫樂に蕩けきった、性の悦びに満ちた顔を浮かべている。知識はあれどそういった行為に奥手な葉にとって、とても直視できるものではなかった。

葉は女生徒から視線を逸らすように踊り場の壁際——取りつけられた大鏡へと目を向ける。その先には、小柄な少年が佇んでいた。

葉よりも幼さを感じさせる顔立ちに、冷たく輝く瞳、無邪気な笑みを浮かべる少年。黒桜学園の男子制服に身を包んではいるが、校内では見かけたことのない生徒である。なに

より、背後が透けて見えるような存在感の希薄さ、そして肌をピリピリと痺れさせるような禍々しい気配から、相手が合わせ鏡の魔と呼ばれる悪霊だというのはすぐにわかった。睨みつける葉とは対照的に、少年はクスリと笑いをこぼす。

「赤くなってる……お姉さん、可愛いね」

「みんなをこんな目にあわせたのは……あなた」

指摘された顔の赤みを隠すように、葉は布袋から長柄を取りだし構える。悪霊の邪気を祓うことを目的に、霊木から切りだされた木刀——葉愛用の一品である。

「あなたは、ここにはいけない……」

それを見た少年の霊は笑いを引つ込め、スウツと目を細めた。

「ダメだよ。この女の子たちはみんな僕に相手をしてもらうのを望んだ……分不相応にも高すぎる理想を抱いてね。だから、このコたちの高すぎる理想を叶えるためにも、僕はこうして生気をもらうんだ。厄霊は人から生気をもらわないと、その姿を長くは保てないからね。でも……このくらいじゃ足りないから、お姉さんからももらおうかな」

少年の周囲の空間が揺らぎ、倒れ伏した少女たちに伸びる。その揺らぎはおそらく少年の身体、霊体の一部なのだろう。触れた瞬間、少女たちの身体がビクリと跳ねた。苦痛ではなく、想像を絶するほどの快楽を与えられて——。

「……させない」

霊刀を片手に持ち替え、ブレザーの内側から護符を取りだした葉は短いスカートの裾を翻し、少年に向かって駆けだす。

「厄払……執行、開始」

「やってみるといいよ、どうせ無理なんだから。このコたちが理想とした僕は、他のなによりも優れた存在なんだ……見かけにおいても、強さにおいてもね」

不敵に笑う少年。けれど葉は動じることもなく、二本の指で挟んだ護符を飛ばし、空間の揺らぎに貼りつけた。目標に接したのを確認し、葉は片目を閉じ、口早に呟く。

「霊縛……陣」

——チ……チリチリ……バチバチバチイッ！

葉の言葉に応え、火花を飛び散らせる護符が空間の揺らぎを縛りつける。それだけではなく、おぼろげでだった揺らぎが白く濁り、はつきりと肉眼で捉えられるように姿を現した。少年の身体から伸びる肉塊のような霊体、それが葉を狙うように先端を向けたまま、上空で固定されている。

「……はあっ」

——本来なら、ここで気合の入った掛け声でも上げるものだろうが、葉はそれがどうにも恥ずかしく、小声でささやくようにしか声をだせなかった。

それでも、霊刀の一撃には僅かな曇りさえない。スカートををはためかせ、肉づきのよい

鋭く流れる痛み、間髪入れずに訪れる快感の波。苦悶の呻きがすぐさま蕩ける嬌声に変わり、唇を濡れ光らせた唾液が口端から溢れ、ダラダラと喉を伝った。力を込めた歯先で、乳首の根元をコリコリと転がすように締めつけ、休めず刺激を加える。痛いのに気持ちいい、そんな相反した二つの感覚が交互に押し寄せ、葉の腰を幾度もビクンッと跳ねさせた。「ふうう、んうう、んっ……あぎいっ、ふむっ、んみゅうう……」

ズキズキと乳先が痛み、淫熱を孕むが、完全にほころんだ肉華からもジククウ……と鈍重な疼きが込み上げ、精神を苛む。弄らずにはいられないとばかりに両手を股間に差し込むと、支えを失った豊満すぎる乳房が、ブルンブルンと水風船のように大きくたわんで自重に引かれた。

「あぐっ……うむうっつ!! んいっ、いぎいい……んっつ!」

思わずそれを止めようとしたのは唇と歯。けっして離すまいというように根元を噛み締め、尖りきった乳首を真空状態の口内に含み、チュウチュウと思いきり吸い上げてしまう。たちまち葉の頭に真つ白な光が広がり、ただ牝の本能だけが指を動かした。

——キユウウ……カリイッ!

普段の自慰でやり慣れた動作、ニユルリと陰核包皮を剥きあげ、捻りながら引つ張り上げると、爪の先端を垂直にめり込ませる。痛々しすぎるその指技、なのに昂った身体は痛がるどころか、最大級の快楽電流を脊髄に走らせた。

「ひうつ……」

——瞬間、突き抜けた快感が下腹部で弾け、絶叫となつて喉奥から飛びだす。

「つついつきやああ——つつ！ ひやめえつ、ひやぐうつ、ヒグウウ——ツツ！」

胸を解放した口が真上を向き、絶叫とともに噴きだした唾液が次々と葉の美貌に降りかかった。けれどそんなことはまったく気になりもせず、ただ頭と身体を覆いつくす快感の嵐に、葉はひたすら夢中になつてしまふ。

乳房が身体の揺れに合わせて上下に揺すられ、先端で狂おしいほどの痛みと快感を生みだした。両手をつ込んだ股間からは、壊れた蛇口のようにブシュツ、ブシュウツ！ と淫液が飛沫となつて飛び散り、おもしろいあとを思わせる水たまりを床に広げてゆく。

「んはあつ、ひあつ、ひああ——つつ！」

それでも股間の指はとどまるところを知らず、媚粘膜を掻き毟るようにデタラメに動き回り、流れる快楽を途切れさせようとしない。それらを貪欲に啜り、貪る葉の身体はガクガクと痙攣を繰り返し、あられもない悲鳴をこぼした。

潤んだ瞳、突きだされた舌、だらしのないヨガリ顔、微塵の演技も感じられない本気の絶頂に、周囲の生徒は言葉を失う。これほど大声で喘ぎを繰り返したせいで教師も、教室の隅の生徒までも、全員が葉の痴態に注目していた。

「マジでイッてる……あの、支倉さんが」

「教室でオナニーして……胸だして」

「どう……しちやったのよ、葉い……」

愕然とした顔、興奮に満ちた表情、ただ驚きしかない視線。それ以外にも様々な感情を含んだ生徒の仕草が淫らな少女に寄せられるが、当人は少しもそれに気づかない。

「ひあ……ふう、んふうう……はあ……んん」

やがて全身を脱力させた葉は、椅子の背にもたれかかり、絶頂の余韻に身を委ねる。胸は露出し、大きく開いた脚の間に両手を差し込んだはしたない格好。だが、激しい絶頂を味わったあとでは、そんなことはどうでもよかった。

(んあ、はっああ……気持ち、よかった……あ)

ぼやける視界に天井が映っている。そこが教室なのだといまさらになって思い直したが、たしかいまは夢の中だと思ひ直す。そこに――。

「はっ、はははは、支倉さんっつ！ あ、あああああなた、な、なにを……」

真つ赤な顔をしたスーツ姿の女性……担任の女教師が妙に慌てふためきながら、詰め寄ってくる。その剣幕を不思議に思いながら、葉の頭もようやく実のある回転をいはじめた。(どうして……もしかして、夢じゃ、ないの……?)

そこまで考えたところで、妙に生々しい身体の疼きがジクリ……と心に侵食した。熱に浮かされていた頭が急激に冷やされ、空気が涼しく頬を撫でてゆく。そこに――あり得な

いはずの声が聞こえた。

『もちろん夢なんかじゃないよ。こんなグチャグチャにアソコ濡らしてさ、よくもまあ夢だなんて思えるよね……お姉さん?』

「——っつ!!」

信じられない……けれど、その声は間違いなく、封じたはずの少年のものだ。気づいた瞬間、全身に冷や汗が噴きだした。寒気と戦慄で朧の身体はガクガクと震えだし、声をだすこともできない。

『こんなに濃厚な牝の匂いプンプンさせて……そりゃみんなも気づくつてば。それなのに夢中でオナニーしてるなんて、ものすごく変態なんだ、お姉さんは……』

揶揄されてカァッと顔が真っ赤になる。その言葉で意識させられた周囲の視線は、半裸の自分へすべて注がれていた。

「あ……う、こ、これ……は、ちが……違う……」

震えながら否定の言葉だけが発せられるが、朧はパニックのあまり、身体を動かすことができなかった。晒している半裸身を隠すこともせず、自分のしてしまった最低の行いに恥じ入り、恐怖で青くなっている。同時に、少年が自分の中で安穏と生き永らえていたことに驚きを隠せなかった。

(どうしてっ?! 浄化は……完全に終わっていたはずっ……なぜ、あなたが……っ)

『言つたじゃない……僕は滅びない。ずっとお姉さんの中で生気を吸い続けてたのに……
気づかなかつたんだ、ちよつとがっかりだね』

「んくつ……ふつ、ううう……」

またしても身体がけだるくなり、手足が重く、持ち上がらなくなる。少年が話しながら
生気を奪つていったのだと、おぼろげに察することができた。そして……今日までの不調
の原因も言葉どおり、生気を吸われ続けていたせいなのだと理解させられてしまった。

（そんな……信じられないっ……私が……厄霊なんかの、好きなように……）

『ふふ、ありがとうね、お姉さん。でもお礼に、お姉さんの願いも叶えてあげたでしょ？
人前で大胆になりたい……普段してるような激しいオナニー、こんなとこでできるように
エッチな気持ちを盛り上げてあげたんだからさ……ふふ、あははははっ』

つまり——自分の性欲をいように操られたというのか。あんな淫夢まで見せつけられ
て、淫らな気分を植えつけられて……。

「くつ……う、ううっ！ あり得ない……こんなの……っ」

悔しさが胸を締めつけ、後悔があとからあとから込み上げる。そこに追い討ちをかける
かのように、少年が嬉しそうにささやきかける。

『それにしても、お姉さんの生気、とつても美味しいね。どれだけ吸つてもすぐに回復す
るし……うん、決めたよ。お姉さんを今日から、僕の奴隷にしてあげる。そうそう、僕が

好きなのはエッチを重ねることで熟成される、エネルギーに満ちた生気だから……エッチ大好きな性奴隷に寝けてからだね』

——無邪気な、悪意の欠片もない少年の恐ろしいセリフに、ゾワリと背筋に怖気が走った。同時に、厄霊の思惑……これからなにをしようとしているのかに気づいた。

考えるより先に、葉はとつさに叫び声を上げていた。

「みんな……逃げてっつ！」

さきほどの自慰に狂い、よがりまくっていた少女の姿ではなく、それは普段の葉が見せている、凜とした態度だった。短時間で二つの少女の顔を見た生徒たちは、その変化に戸惑いを隠せない。だが……先日の厄払い、その最後の瞬間を偶然にも目撃していた生徒——一人の女子生徒だけは、少女の身に起こった異変に気がついた。

「支倉さん……まさか……」

考えるのはあとだった。少女は最悪の展開を予測し、ためらわずに席を立って教室の外へ向かおうと、扉に手をかけた。

「ど、どうしたの……そんなに慌てて……」

「支倉さんは、たぶん厄霊に操られてるんですっ！ 他の執行委員に言えば、きっとなんとか……」

教師に怒鳴るような返事をし、少女は必死で扉を開こうとする。だが——。

「え……？ あ、あれ、どうしてっ……どうしてよっ！」

扉は見えない力で固定されてしまっているかのように、少女が渾身の力を込めて引いているというのにピクリとも動かない。その様子を見た葉の心は、絶望に黒く塗りつぶされてしまう。

（そんな……すでに、結界が……くっ、なんとかっ……）

結界は未完成のようで、僅かなほころびが見えた。葉は机から護符を取りだし、必死に腕を振って扉に投げつける。けれど結界に触れた瞬間、護符は溶かされたように消えうせてしまい、結界は破られるどころか傷ついた様子さえもなかった。

『ムダさ、この結界は内から破ることができないんだからね。隙間を抜けて外には出たみたいだけど……結界に触れたのになんの反応もしない護符じゃ、どのみち、どうすることもできないよ。……うん、結界も完成したし、これで中での物音も叫び声も……決して外にはもれなくなった』

少年の笑いを含んだ声に、葉はキュツと唇を噛む。それでも、希望を捨てない葉の瞳は輝きを失っておらず、まだなにかを考えようとしていた。その希望さえ奪おうというように、少年は少女の心を砕こうと最悪のシナリオを展開させる。

『……さて、余計なことをしようとした罰だ。たっぷりいやらしい目に合わせて、みんなの前でよがらせてあげる。……でも、お姉さんにとってはご褒美になっちゃうかもね』

少年の擲擧に顔を赤くしながらも、怒鳴り返そうとする葉。だがそれより早く、体内で異常なほどの淫氣が膨れ上がり、あつという間に葉の身体から自由を奪い去った。

(なに……を……)

言葉もだせず、心の中で苦しげに呟く葉。人の目を介したように映る視界では、もれだした淫氣が教室中に充滿してゆくのが見える。黒く淀んだ瘴氣が広がり、それを見ることの叶わない生徒たち、そして女教師を飲み込んでいった。

『さ、これで終わりだよ。僕の淫氣をたっぷり染み込ませてやったから、みんなの欲望は普段の数百倍……あんなに激しいお姉さんのオナニーを見たあとじゃ、どうなるか……』
(そんな……なんて、ことを……あつ!!)

周囲の様子をうかがった葉の顔が、信じられないものを見たように引きつり、そのまま強張った。教室にいる誰もがその顔を淫熱で火照らせ、ハアハアと荒い息をつき、獣欲にまみれた瞳をギラギラと輝かせている。さきほど助けを呼ぼうとしてくれた友人は無事なのか——そう思つて葉が扉に目を向けると、少女はすでに瞳を淫欲で潤ませ、股間に手を入れて激しい水音を奏でていた。

こらえきれなくなつた生徒の数人が、服を脱ぎだす。一人の女子などは全裸になり、ベチャベチャと唾液をこぼしながら、数人の男子の唇に舌を絡め、情熱的な口づけを浴びせていた。その光景に触発されたように、あちこちで男女が身体を絡ませはじめた。

「み……みんな、ダメ……正気、に……んぐつ」

『余計なことしないでよ。……しばらくお姉さんの中で見物させてもらうから、たつぷり犯されて、ヒィヒィよがる姿を晒してね』

全身の力を振り絞り、抵抗の意思を込めて生徒たちに呼びかけようとした葉だったが、その言葉は少年によつてせき止められてしまう。そして代わりに……勝手に動かされる口からは、葉が言うはずもないような言葉だった。

「んあ……はああ、みんなあ……」

自分の声であるはずなのに、たつぷりと媚を含んだ声音が流れ、葉は背筋を震わせる。
（なにを、言わせるつもり……放しなさいっ……）

見えない、身体の奥深くに潜んでいる厄霊に命じるが、むろんそれが聞き入れられるはずもない。ピチャリ……と湿らされた唇が鳴り、いやらしく唾液の糸を引いて口が開かれてしまう。葉はスルリとショーツを抜き取り、周囲に艶かしい視線を送る。

「みんな、私のこと……怖くって、近寄りにくいって、思ってるかも知れないけど……ほ、本当は、私……毎日こんなオナニーばかりしてる、エッチな、すつごくエッチな女の子のお……うふふ、ほら、こおんなに……」

言いながら、勝手に葉の身体は近くにいた男子にしなだれかかると、ズボンの上から股間に吸いつき、桃色の舌を目いっぱい伸ばしてベロりと舐め上げた。淫気の影響ですつか

り固くなっている肉棒、その形をなぞるように舌を往復させると、嬉しくてたまらないというように瞳が淫蕩に染まってゆく。その様子に困惑するものは誰もおらず、周囲からはニヤけた笑いと劣情をぶつけようという意思しか向けられなかった。

「ね、いやらしいの、私……だからおねがあい、もつと私のエッチなところ触って、見てえ……いっぱい、感じたいのお……」

（や、やめ……見ないで、みんな、お願い……）

少女の願いも虚しく、発情しつばなしの生徒たちはすぐに誘惑に乗り、次々と少女の肢体に手を伸ばす。四つん這いになっている葉の背から腕が回され、たぶたと揺れ躍る豊乳が遠慮呵責なしに握られる。

「ああ……はあん、もつとお……んふうつ、オナニーより、気持ちいいのお……」

男子の握力による痛いぐらいの愛撫、けれど操られる葉の口は、気持ちよくなって仕方がないというような甘い嬌声をもらし、さらなる愛撫をおねだりする。その声に反応し、周りの男子たちが先を争うように、葉の乳房に群がった。

「うおおつ、スッゲ……柔らけえ、支倉のチチ……」

「くつそ、俺にも揉ませろ！……な、なんだこりやあつ！」

「やんつ……慌てないで、みんな順番に揉んでえ……。みんなの視線でいっつも感じてた、エッチなオッパイ……潰れるぐらい弄り回して……んんう」

耳を塞ぎたくなるくらい、淫らで最低な言葉が自分の口から飛びだしてゆく。けれど葉はこの惨事から目を逸らすことも耳を閉ざすこともできず、特等席から無理やりに見せつけられてしまう。

(どうして、こんな……あつ)

少女の声、仕草、そして舌使いに興奮を煽られたのか、ズボンの上から舐められていた男子の肉棒が、ビクビクと躍動しながら完全にそり立ったことを伝えてくる。それを見た葉の目は勝手に細められ、言いたくもないセリフを口にされる。

「あはっ、大きくなつたあ……はあ、む……んんん」

ジッパーを歯で啣えて下ろし、ズボン、トランクスと次々に口だけで裸にしてゆく葉。風俗嬢でもないようなサービスをされ、ますます固くなつた肉棒がついに顔をだした。遊びなれているのか男子のペニスは赤黒く、牛乳ビンほどの太さとラップの芯ほどの長さを持ち合わせた、肉凶器と呼べるほどの凶悪なモノだった。臍まで反り返つた肉棒は、血管をビクビクと震えさせて跳ね、牡の興奮を目の前の牝……葉に誇示する。

(こん、な……近くで、男の人のペニスを……くうっ、臭くて……汚い……)

真っ赤に顔が染まり、一刻も早く顔を遠ざけてしまいたくなる。こんな厄霊以上に醜悪なものを舐めていたなど、気が変になつてしまふそうだ。——本音はそれだというのに、動かない身体はそれを見て、心底嬉しいというように頬をほころばせてしまう。

「ふわあ……おつきくて、固くて、熱くって……それに……」

葉はスンスンと鼻をヒクつかせ、頬擦りせんばかりに肉棒に顔を寄せて、うつとりと目を潤ませる。

「とおつても、いいにおい……ちゅっ」

すでに先走りをこぼし、濡れ光っていた先端に唇をつけて軽く吸い上げる。先走りとは思えないほど苦く、青臭い味と臭いが込み上げ、心の中で葉は悲鳴を上げた。

（いやだ……いや、いやいやいやあつ！　こんな……初めて、なのに……）

未経験だったファーストキス、それを汚く醜い肉棒に奪われてしまった。頭が真っ白になるほどのショックと悲しみが押し寄せるが、そんな本心の叫びとは裏腹に、葉は口を大きく開け、それを亀頭の上まで持ち上げた。

「あはっ、いただきま〜す……はあ、んむう……じゆる、ちゅばああ……」

（——つつつ?!　〜〜〜つつつ!）

キスのショックも冷めやらぬまま、今度は口内をあつさりとレイプされる。熱く固い感触が喉の奥に突き刺さり、苦痛に咳き込みそうになり、涙が込み上げた。……けれど、苦しきだけははつきりと感じられるのに、表面化する葉の仕草は嬉々とした口奉仕、そして全身から送り込まれる快樂に悶える声だ。

「んじゅう、ちゅば、れるおお……ぶあつ、はああ……オチンチン、とおつても美味しい

よお……はあむ、んぐつ、んんう〜」

「おっ、おおっ！ いいぞ、支倉……くうっ」

近寄りかたかった美少女が己の肉棒に積極的な奉仕をする痴態に、男子はこれ以上ないほどの興奮を感じる。それは葉も同じようで、揉まれ続ける乳房の先端では乳首がピンとしこり立ち、秘部はダラダラと涎を垂れ流しにする。その反応を見た別の男子が、その部分に目をつけるのは至極当然の流れだった。

「うっわ、大洪水だぜ……淫乱だな、支倉」

（んあつ、くう……いや、見ないで……放してっ……んっ、ううん……）

男子生徒の手が股間に伸び、グチュグチュとくぐもった音がこぼれだす。陰唇付近を強引に押し撫でられる感覚、けれどそれだけでは足りないというように葉は腰をくねらせ、自ら手のほうへ秘部を突きだした。指にヌラヌラと淫液を塗りたくりながら、口に啜え込んだ太い肉棒に丁寧な舌使いを施してゆく。

「んえおお……ほおあ、こおんなにカスタまつてるう……んふふ、チーズみたいにくっつり……食べちゃお〜つと、んむう、はむう、ちゆる、んぐつ……ふああ、エツチな味で、感じちやうのお……」

（いやああつ、そんな、こと……言わないで、やめて……うっ、くふうっ……）

鼻から突き抜ける生臭い牡の臭いに頭がクラクラし、吐き気が込み上げる。だが——自

慰で昂つた身体のあちこちを弄られているせいで、嫌悪を感じていた本心の悲鳴にも、僅かながら甘い色が含まれはじめた。そこに――。

(んあ、はああ……ダ、メ……そこ……んっ、んんっっ!?)

生暖かい粘膜質の塊が触れ、いきなり秘部を撫で上げた。いや、撫でるといふよりも舐めるようなザラついた感触に、葉は声にならない呻きを盛大に上げてしまっていた。

チラリとうかがった両脚の間、太ももに挟まれるようにして股間に顔を近づけているのは、今朝心配そうに声をかけてくれた友人だった。舌をチロチロと蠢かせ、滴る蜜液を何度も舐め取り、ついにはパクパクとだらしなく開閉する淫肉に吸いつき、そのままジュルジュルと吸い上げてゆく。

「んっ……ちゅぶ、じゆるう……ふふ、葉のオマ○コ、おいしい……」

「ひあっ、あんっ、あああんっっ! んあ、はむ、んぶ……ちゆるう……」

女子生徒の唇にたまらず嬌声をもらし、その快感をこらえながら一旦は放してしまった肉棒を唾えなおす葉。口内の空気を抜き、熱い肉茎を喉元まで飲み込んで、亀頭にペロペロと舌を這い回らせると、ビクビクと震えて反応が返った。先端からのぬるつきが舌に触り、味わったことのない苦味が口の中を満たす。

(ひやあ……苦い、不味い……ふうんっ! やめ、やめて……んうっ、んはああんっ!)

——ジュ……ンジュウウウ、ジュバア、ズチュウウ……。

陰唇に吸いつく女生徒の口技がさらに激しくなった。ジュパツ、ズルウ……と響く粘っこい水音が、ほかの女子にまで興味をそそらせてしまう。

「あゝ、ずるい！ あたしもあたしも〜」

「あ、わたしも……ふふ、葉のオッパイ、大きいのに形も綺麗だから興味あつたんだ〜」
口々にそう言いながら、葉の胸に、そして秘部に舌を這わせてゆく。左右の乳首が異なる動きで舐められ、吸われ、コリコリと甘く噛まれて転がされる。陰唇の上でディープキスのように絡まりあう数人の女生徒の舌が、膣口の粘膜を舐め蕩かし、陰唇の花弁を丁寧になぞっていった。

「ちゅばああつ、ふううんつ……みんなあ、上手う……ひんつ、オッパイとオマ○コ、同時にされてえつ……すつごくいのおつ、ひあああつ！ んぶうつ、ちゅばあ……」

包皮から剥きだされた陰核が男子の指に捻られ、同時に女子から舌奉仕を浴びせられ、こらえようもなく葉は背筋をゾクゾクと震わせ、勢いよく腰をはね上げる。時折、肉棒を舐めしやぶる水音に混じって、口端から『あひつ、あひいつ』と悦楽に侵された嬌声もれ聞こえた。

（もう……いや、いやあ……みんな、しつかり——ふううんつつ!? そ、そこは……）

それでも快楽に流されまいとする葉だったが、突然襲いかかった奇妙な感触に、怖気とそれを上回るほどの快感を感じてしまった。どこを舐められているのか、それを思うと屈

辱と恥辱で嫌悪しか感じなくても無理はないというのに、あろうことかこれまでで最高の快感を感じたことで、葉は愕然とする。

（そんな……私、お尻なんか、で……ひいんっ！ や、やあ……っああああっ！）

陰唇だけでは飽き足らず、さらに葉の身体を味わいつくそうというように、一人の女子が尻の谷間に鼻先を埋め、ヌルウ……と舌を伸ばしたのだ。たつぷりの唾液を乗せた舌の突き入れに、窄まった葉の菊口はあっけなく陥落する。ヒクヒクとわななきながら菊壺はその力を緩め、柔らかく暖かい舌を咀嚼しながら奥へ奥へと導いてしまう。

「おあっ、あ……いあ、あはあっ……ひああ……うん」

思わず肉棒を離し、仰け反って上を向いた口から快楽に蕩けた声が溢れる。唾液を喉元に伝わせながら、葉は瞳を快楽色に染めて、肉棒の先端に舌を伸ばしていた。腸内粘膜を這いずる一匹の生き物のような舌の動き、決して自分では得ることのできない感触は、葉の心を簡単に狂わせてしまう。ヌルリ、ヌロオ……と菊壺を舐め回されるたびに、細胞が一つ一つ蕩けて流れだしてしまうのではないかと思うほど、熱い快感を得てしまった。

「ちゆるる、れるお……んん、おひり、いいのお？」

菊齧に丹念に唾液を擦り込みながら、少女が口を開く。それは、いち早く葉の危機に気づいて助けを呼ぼうとしていた女子だった。彼女の変わりようにショックを受ける葉だが、そんなことはお構いなしに口は淫らな叫びを張り上げてしまう。

「そうっ、そうなのっつ！ 葉は、お尻でオナニーしてた変態だからあつ！ んんっ……お尻弄られるの、ひあんっ……すっごく、感じるのっ、大好きなおつ、んはああつ！」
 「やっただあ、葉ってば、やっらしっ」

ケタケタと響く女子の笑い声、男子の揶揄の視線、それらを感じて葉は全身を真っ赤に染めて恥辱の炎に焼かれる。お尻を舐められる、まして舌を入れられるなど初めての経験だというのに、これほどの快感を与えられるなんて、あきらかに異常だった。本当に自分に変態なのではないか……そんなことを考えると、ますます恥じ入ってしまう。

（そ、そんなこと、ない……見ないで、お願い、言わないで……）

だが、葉の必死の願いが叶えられることはない。

舌の動きに合わせてクネクネと動く尻は、犯してくる女子から逃げようとするどころかより深く舌を飲み込もうと押しつけられ、感じたかと思う心を裏切るように、頭が真っ白になるほどの快感を得てしまう。

（ひんっ、あつ、あはあ……んんっ、やだ……気持ち、悪いのに……いいんっ、こ、こんな、こと……くふううんっ！）

ジュルリ、ジュパア……と、全身に這う舌から湿った音が奏でられ、脳内に満ちてゆく。身体中を撫でる手や舌から途切れることなく快感が送り込まれ、次第に葉の思考はなにも考えられなくなり、特にアナルを蹂躪する舌の動きに夢中になってしまう。

「ふあああうんっ、あっ、ひきやあんっ！　いいっ、気持ちいいっ！　んじゅうっ、はぶっ、ちゅばあ……じゆるるう……」

その快感を分け与えようというように、口の中では肉棒をベチャベチャと舐め回し、頭を前後に振り立てて熱烈な奉仕を繰り返す。淫欲に染まった上目遣いで男子を見上げると、相手の感じている表情がうかがえ、心の底に充足感が満ちてしまった。

周囲ではあぶれた男女が交わりあい、教室中に淫声の合唱が響く。それらに触発されたように、葉の身体はますます敏感になつて快楽に反応し、意識が高く高く遠ざかつてゆく。（ひやあ……わ、私、私……お尻、されて……オチンチン、舐めて……このまま、じゃ）ブルブルと全身を震わせ、葉は最後の一押しを受けるまいと懸命にこらえ続ける。だが、ツプリと膺口に突き立てられた指を淫粘膜がキュツと啜え込んでしまい、自身の身体の変を指の主である男子に気づかれてしまった。

「おっ？　はは……おっ、みんな！　支倉、もうイツちまいそうだぜ？」
（つつっ!?　や、やだ……言わないで、そんなこと……）

だが、口にされた言葉はもはや戻らない。それどころか男子の言葉を肯定するように、痴女じみた口調で葉は叫ばされてしまう。

「んじゅ、ちゅばあ……んああ、バレちゃったあ……んっ、あひいんっ、そ、そうなのおっ、私……もうイツちやううっ！　みんなに身体中弄られてっ、オチンチン、ペロペロ

オ……っつてしながら、アへ顔晒して、イクのおおっ！」

全員がクスクスと笑いをもらし、葉への愛撫をさらに強くし、あちこちから快感を流し込んでくる。葉は髪を振り乱し、身悶えて感じていることを周囲に伝えてしまう。

「も、教室でこんなことしてイッチャうなんて、葉つたら……ん、ちゅう〜」

「本当ね、エッチな葉……かゝわいい、じゆる、ちゅばあ……」

「ひうつ?! んああつ、ふみゅうつ、んぐつ、んじゆるるうつ……んんうつつ!」

声をこらえようとしながら、葉は口の中の肉棒を懸命に責め立ててしまう。唾液をすり込んで扱きたてる口内粘膜の動きに、肉棒がビクビクンと大きく震えた。

「くっ……う、やべ、もう限界……」

その眩きを耳にし、葉は顔をサアツと青く染める。

(いや……やめ、やめてえ……んうう、ださ、ないで……)

——だが、その懸命の訴えは誰の耳にも届くことはない。涙に暮れる葉の心に届いたのは、女子の嬉々とした甘い声……そして、鋭く突き刺さるような快感の一撃だった。

「せつかくだし、口にだしてもらいなながらイッチャつたら〜? ほおら……これで、あ……ん」

——カリイッッ!

「ひきいいんつつ!!」

突然走った鋭すぎる刺激、葉は喉の奥で恐怖に引きつった悲鳴を吐きこぼした。それが敏感な肉芽への菌による愛撫だと気づいた瞬間、口が勝手に、大きく膨れ上がった。熱い肉棒の先端へ、同じような甘噛みを浴びせてしまう。微かな痛みと同時に、ぬるつく口内以上の締めつけを肉棒に送り込む。プクリと広がった尿道口に、葉は舌先をツンと尖らせ、掘り進むように潜り込ませた。

「んんっ、んんう~~~~~~~~ふくっ、むじゅう……」

「支倉っ……それスツゲ……くうっ！」

——ビクビクッ、ドクウツ！

男子の叫びとともに、熱い逆りが口内で弾け、苦くネットリと絡みつく不快な感触が舌を覆い尽くし、汚してゆく。喉の奥を叩くドロリと固まった粘液の刺激、鼻に込み上げる生臭い汚液の臭い、どれもが葉をむせ返らせ、吐き気をもよおさせる。

だというのに、葉の身体は牝の本能が狂わせたのか、最低の反応をしてしまう。青臭い牡液が喉の奥に流れ落ちた瞬間、子宮がカツと燃え上がり、その波が全身へ広がり、脳天を突き上げた。同時に菌の立てられた陰核がコリコリと歯先で優しくすり潰され、白い閃光が視界いっぱい膨れ上がる。ビクビクビクッと全身をはね上げ、肉棒を決して離さないように啞え込みながら、頭がガクガクと前後に振れてしまう。

（いやあっ……こ、こんなの、こんな状況で……私、私いいっ！ ダメッ、あああつ、ダ

メエエツ！ ひやうううんつつ！

全身を弄られる快感、陰核とアナルから突き抜ける爆発的な快楽、そして精液を注がれて満たされてしまう女悦……すべてが絡みあつて、葉はこらえようのない官能の高まりに飲み込まれ、意識が遠くへ吹き飛ばされた。

（んああああつつ！ イ……イッてるっ……私いつ、イッてる——うつつ！）

絶頂の衝撃に腰が跳ね、膣奥からおもらしのように淫液を垂れ流して、股下の女子の顔に浴びせかけてしまう。キャツと嬉しそうな悲鳴を耳にしながら、葉は四肢を痙攣させ、膣口で指を食い締め、菊壺の舌をより深くへ飲み込んでいった。

「んうっ、んぐっ、んつく……ううん、んみゅ、んっ、んんん……っ」

コクリ、コクリと勝手に喉が動き、舌が蠢き、美味しそうに精液を啜り上げて飲み下してしまう。それに合わせて葉の身体は小刻みに何度も震え、見えない肉棒を相手にしているように、フリフリと空腰を使って股間に取りつく舌や指、唇と歯の感触を堪能してしまう。葉が抑えきれないほどの情欲に満たされ、激しく絶頂しているのは誰の目にも明らかだった。

「は、支倉が……俺のを飲んでイキまくってるっ……」

「んじゆる、ちゅう……ぶあ、なに言ってるんの、葉は私の口でイッたのよ、ね〜？」

「お、おいつ！ だしたら代われよ！」

精をだし尽くした肉棒にまだ吸いつき、絶頂に腰を振り続ける少女に興奮した別の男子が、フェラ奉仕を受けた男子を押しつけ、己の肉棒を葉の口元に近づける。新しいペニスにはさきほどの大きさには足りないが、それでも十分な長さを持っていた。美少女の痴態に勃起させられた肉棒は先端をドロドロに湿らせ、すでに牡の臭いが濃厚に立ち上がっていた。萎えた肉棒を抜き取られた口から唾液と精液の入り混じった白濁液をポタポタとこぼし、葉はトロンと瞳を蕩けさせたまま、唇のぬめりをチロリと舌で舐めとつた。

「いいよお……あなたのも、お口でしてあげるう……」

んばあ……と口を大きく開ける葉。だが男子は慌てた声でそれを止める。

「お、俺は、その胸でしてくれよ……っ」

驚いたように瞳を瞬かせる葉、けれど次の瞬間、ニッコリと目を細めて頷いた。

「はあい……私のエッチなオッパイで、気持ちよくなつてね……」

両手で乳房を掬い上げるように抱え、男子の腰にもたれかかりながら、熱く固く、滾っている肉棒を柔肉の膨らみで包み込んでしまった。決して小さくない相手のペニスだというのに、葉の豊満すぎる双丘はその先端だけを覗かせて、あますところなく飲み込んでふにゆりと形を変えてしまう。その柔らかさとしつとりとした肌触りに、男子は歓喜の声を張り上げる。

「うっ、くあああ……っす、スゴすぎ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>